



茶道と武道の間

— 米国での茶道と少林寺拳法の指導を通じて思うこと —

Eric-Messersmith

フロリダ国際大学講師

わたしのプレゼンテーションのテーマである“茶道と武道の接点”は一見、何の関係もないように思われますが、話を進むにつれ、どうして両者の求めるものが一緒になるのかという理由がご理解いただけたらと思います。私の論点は、禅の思想が一見何の関係もない両者を関連づけ、お互いを引き立たせているということです。

一般に、“禅”と“お茶”は中国が発祥地で、どちらも中国の少林寺で栄えたものとして知られています。

禅仏教の主な目的は“さとり”を得ることで、(禅の祖である)達磨の教えによると、“悟り”は書物やお経や儀式を通して得られるのではなく、瞑想を通して自分の中に見つけられるものであります。達磨は、誰もが自分の中に“仏”を有し、瞑想を行うことによって“仏性”を見出すことができると教えています。邪念を払い、物欲から解放された心を持つことで、私たちは真の仏の心を見つけることができるのです。

禅の修業は、邪念を払い、鋭い眼識を得るため 長時間の座禅を伴います。“抹茶”は禅の思想とともに日本に入ってきました。抹茶は長い座禅中に居眠りしないようにする効果がありました。ある達磨に関する説によると、一つには達磨がお茶の木を中国に持ってきたという説と、もう一つは達磨が座禅中に居眠りをして、その怒りにまぶたを引きちぎり、それが地上に落ちて発芽し、それが中国で最初の茶の木となったそうです。今日まで、日本の禅寺では茶道の初期の形として、達磨禅師を祀って行われているところもあります。

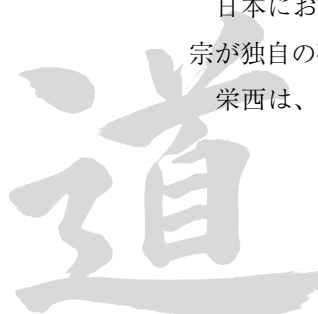
次に茶の祖といわれる陸羽 Li Yu について、少しお話しします。陸羽は、Lu Hongjian とか、Lu Ji あるいは Lu Jici と呼ばれ、唐の時代に、湖北 Hubei 省の天門 Tianmen 郡で生まれました。幼少のころは禅寺で過ごしましたが、李隆基 Li Longji 皇帝のころ、すなわち 8 世紀の中ごろ、生まれ故郷の知事にその才能を見出され、学校で勉強するチャンスを得ました。彼の努力は並外れており、その才能はすぐに世間に知れ渡り、まもなく皇帝の世継ぎの文学の講師として採用され、さらには皇室の儀式をつかさどる責任者として起用されましたが、その地位を断りました。

陸羽は官職の階段を上る考えは持たず、文人として生きることを選び、勉学や研究、著名人や学者たちと交わることを好みました。とりわけ“茶”には特別な興味を持ち、研究することによって、その木の栽培方や茶葉、喫茶方をよく知っていました。後にかれは 浙江 Zhejiang 省の湖州 Huzhou という所で隠遁者の生活を送り、世界で初めての“茶”の専門書である『茶経』を書き上げました。

“お茶”は中国に始まり、世界中に広まっています。今では 5 大陸の 50 以上の国で茶が栽培されています。茶の栽培や喫茶は直接であれ間接であれ、中国からもたらされ世界中に広がっています。東洋と西洋の交流を語るとき、陸路の「シルクロード」「絹の道」や海路を考えるかもしれません。しかし、同様に茶が移動し、世界各国に分岐して行ったルートもあるのです。

日本においては、僧、栄西 (1141 ~ 1215) が臨済宗という禅宗を紹介し、彼の元ではじめて仏教の禅宗が独自の確立した宗派として認識されるようになりました。彼はまた、お茶の栽培にも貢献しました。

栄西は、その善行国師という称号から解るように、岡山の神社の出身ですが、当時の多くの僧侶がし



たように天台宗総本山比叡山の延暦寺で修行を積みました。1168年に初めて中国にわたり禅のセンター、とりわけ天台 Tient' ai 山で栄えていたセンターを訪れ、そこで見かつ体験したことに大変、感銘を受けました。そして禅は日本における仏教の信仰を呼び覚まさせるのに大いに役立つと確信したのです。

1187年には二度目の大陸訪問を試み、仏教の源を探し当てるためインドへ行こうとしました。けれど中国との国境を越える許可がもらえず、1191年まで天台 Tient' ai 山にとどまり修行を積み、臨済宗の僧侶となり帰国しました。そして、九州の博多に最初の臨済宗の寺となる聖福寺を立てました。

栄西は仏教の規律より座禅を重視すると宣言したので天台宗の僧侶たちの怒りを買うことになり、ご法度をくらいそうになったが、将軍源頼家のご加護を受け1202年に京都の建仁寺の管長に就任しました。最澄や日蓮のように栄西も彼の仏教を国の安寧に役立つよう『興禅護国論』という書物を著し、禅の普及に努めました。

しかし、栄西は常時、天台宗と真言宗の反対を受けることを余儀なくされ、妥協するために建仁寺を禅宗の場とするだけでなく、天台宗や真言宗の信仰の場としたのです。実際、彼は真言宗のお経を読み続けました。そして死の直前には幕府の命により第三番目の禅寺となる寿福寺を鎌倉に開山し、以後足利将軍と武士階級および禅との緊密な関係を樹立しました。

お茶の紹介

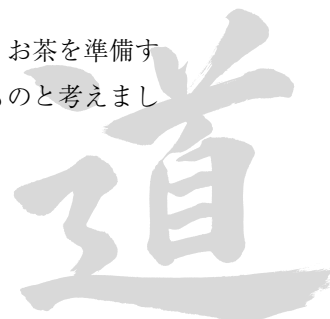
お茶は西暦800年ごろ、中国へ行った仏教の僧侶たちによって日本にもたらされましたが、栄西のころまではその栽培方法や喫茶はあまり普及しませんでした。1191年、栄西は中国から帰り、お茶の種を持ち帰り京都の近郊に植えました。そして1241年には“喫茶養生記”（お茶の効用）を著しお茶の滋養と治療効果の価値を説きました。お茶は眠気を防ぐ軽い刺激剤としての効果があるので座禅の補助役として重要視されました。

禅は鎌倉時代の初めごろ日本に紹介され、貴族から権力を奪った新しい武士階級に受け入れられました。初代将軍の足利尊氏以来、歴代の足利将軍たちは、美術品の収集と鑑識にことのほか興味を持っており、とくに義満は美術品獲得のため明との貿易を促進しました。事実、多くの偉大な絵画や陶磁器、書は、明へ勉強のためわたった僧侶によって持ち帰られ、禅寺に秘蔵され、その多くは足利将軍によって強請され、将軍家の所持品となったのです。八代将軍義政は、「同朋衆」と呼ばれた美術品の目利きである能阿彌(1397～1471)とその息子の芸阿彌(1431～1485)を京都東山殿の蔵にあった将軍家の美術品の調査と目録作成に従事させました。それと同時に能阿彌に当時おこりつつあった書院造りという建築様式の形を完成させるよう命じましたが、このプロジェクトは能阿彌の孫である宗阿彌(1485?～1525)によって完成しました。能阿彌はまた、茶の湯の初期の創始者である村田珠光(1422～1502)のもとで学び、茶の湯の完成に貢献し、珠光を義政に推薦しました。

村田珠光は室町時代の茶の湯の実践者で、禅を学び茶の湯における精神面の重要さを説きました。

珠光は、どういう理由かわからないが、幼少に寺を出て、足利義政のアドバイザーであった能阿彌と中国の古典の茶道の知識を持つ大徳寺の一休禅師と出会いました。一休は珠光に、禅の修行と茶の湯の熟達における精神とが似ていることを示唆しました。珠光は、当時急速に発展しつつあった茶の湯の実践にこの相似性を応用することを生涯追求し続けました。また彼は、特に客をもてなすための茶の湯には亭主自身もてなすことの重要さを説いたのです。

珠光は、茶の湯に、ただ単なる娯楽や薬用効果あるいは寺院の儀式以上のものを見出し、お茶を準備することや飲むことは、悟りが日常の出来事の中に見出されるように、禅的価値を表しうるものと考えまし





た。

16世紀の日本では各地の大名たちが権力争いを続けているさなか、堺の富裕な商人たちは、外国との貿易などで膨大な富を蓄え、堺の町の平和と繁栄に貢献しました。これらの商人たちは、茶道をも含む高度な文化を支持しました。千利休は、茶道を今日広く行われている侘び茶の域にまで高めた、もっとも有名な茶人です。利休もまた、この裕福な堺の商人の一人でした。堺の商人達の経済力は堺の町が自治区となり当時の国の支配者さえも逆らうことができないほど龐大なものでした。当時堺の商人たちは建物に贅を尽くすことで有名でしたが、侘び茶はたいへん狭い二畳の畳の部屋で行われました。ふだん彼らの住まいは金箔などを施した絵のあるふすまや屏風で囲まれていました。しかし茶の湯では、無駄なものを極力省いた簡素な部屋を好みました。他に何も省くものがなくなったとき、そこに緊張感があふれ、それこそが彼らにとって最高の贅沢となり最も独創的な芸術と感じられたのでした。

利休と侘び茶に関して、ここに一つの逸話があります。それは秀吉が利休の朝顔の花をめでの茶事に呼ばれたとき、利休は庭の朝顔の花を一輪だけ残して他は全部切って捨てました。そして秀吉をもてなすためその一輪を床の間に飾りました。この出来事は秀吉の想像を超えるものであり、茶人にしてやられたと思ひ、自分よりできた茶人利休に対して、これより不満を持つようになり、やがて秀吉は利休に切腹を言い渡す結果となりましたが、こうした精神の目利きになることに茶道の真髓が禅の精神と相似するのです。

さて私自身の話になりますが、少林寺拳法と茶道を学ぶという選択は、ある意味では、運命的であったかもしれません。もちろん誰もが選択することはできますが、私自身のように、かなり長い間続けることができたのは別問題だと思います。ではなぜ私は8年も続けることができたのでしょうか。それは長い時間正座をしたり、少林寺の道場でのきつい稽古があったからではなく、裏千家15代千玄室大宗匠と少林寺拳法初代館長・宗道臣先生の思想によるものでした。

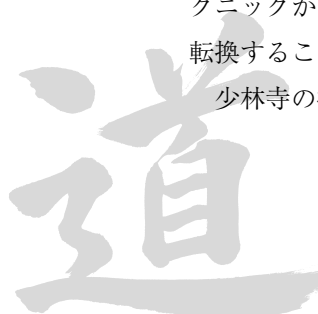
少林寺拳法の創始者、宗道臣は「半ば人のために、半ば自分のために」と述べています。宗道臣は、第二次世界大戦によってもたらされた中国東北部（旧満州）における極度に荒廃した状態を目の当たりにして1947年に少林寺拳法を創立しました。この地域では、道徳的価値のあらゆる形態を人々が失っていました。そして法律や政治や軍隊というものは、そこに従事する人たちの考え方によって形成されることに気づきました。

少林寺拳法は、もともと護身と、肉体と精神のバランスをとるため、さらに練習を通しての相互の成長を図るために形づくられました。少林寺は相手を倒すためだけのために練習をするのではなく、自分に打ち勝つために修行を積むのであって、自己形成のため精神を鍛え、現実と立ち向かうべくするのが目的であります。

一般に座禅は“静”で、拳法は“動”を象徴するようですが、少林寺の考えでは、どちらもそれ一つだけでは完全な一個の形とはなりえないということです。それゆえ、技でもソフトテクニック（たとえば投げ技、ひねり技やつかみ技など）とハードテクニック（突き技やけり技など）が同じウエートで重要視されています。そのうえ、少林寺の技の練習には二人の拳士の両方の努力が必要なので、技の練習には相互の尊敬と理解と成長が促されます。

また少林寺の技は、人間の体の自然な動きに基づいているので、不自然でごちない動きはありません。それゆえ一つの技から別の技への転換には容易に移ることができ、ソフトテクニックからでも、ハードテクニックからでも、または、それらのコンビネーションのテクニックからでも流れや力を失わずに容易に転換することができます。

少林寺の技は、弱者が強者をコントロールすることができるよう力学的、生理学的な原理に基づいて編



み出されているので、年齢や性の区別に関係なく技を学ぶことができます。

「人、人、人、すべては人の質による。」宗道臣は、世界のすべてが人によると深く実感したので、全人類が望む世界平和を得るには、できるだけ多くの若い人たちに強い正義感と、勇気と哀れみを抱くよう、教育または育成しなければならないと信じました。そこで彼は若い人たちを教育することに決めました。このために、中国で学んだ様々な武術に、自身のオリジナルの技を加え、「少林寺拳法」と名づけました。そして少林寺拳法を土台にして、より良い人の育成をするべき方法を発展させました。

少林寺拳法は体と心を同時に鍛える方法です。この訓練によって、強い体と不屈の精神を養い、世の中にプラスになる自力の力を持つ人間を作り上げることができるのです。

少林寺拳法の基本精神は、精神と肉体をきたえ、自力の精神を養い、自己の幸せのためだけでなく、なかば他人の幸せも追求するより多くの人を育てることによってよりよい世の中を作ることです。

少林寺には、競争は存在しません。すべての練習は二人で行われ、一方が攻撃で、もう一方が防御を行い、役を変えながら練習します。相手は競争相手でもなく、また敵でもなく、目的はどちらが勝つということではなく、相互協力によって、お互いの技を磨くことです。これが柔道や対戦相手に勝つことを促す格闘技と少林寺拳法との最も違うところです。

最後に、少林寺のスローガンである“拳禅一如”ですが、これは私にとって、ただ座禅を通しての禅ではなく、行動またはアクションによる禅の修業と理解するようになりました。

お茶の修行に関しては、利休堂で誓いを立てたその日から、今日まで私の師である千玄室 15 代大宗匠の目標と同じです。師は、この鹿屋の地で、特攻隊の一員として出撃目前に同じミッションを持つ隊員たちに一碗のお茶をささげました。その直後に、終戦の知らせを受け、一命をとりとめました。その日以降“一碗から平和を”が大宗匠のライフワークになりました。

高等教育において武道と茶道を学ぶ意義について

西欧の学生は、克己心と同時に人類に有益となる何かを学ぶ必要があります。茶道は、生きるために、また社会に貢献するために必要なマナーの基礎や、礼儀正しさを教えてくれます。さらに、人々に謙虚になることを示す窓口であり、また、日本的な美的文化とはどういうものなのかを示す窓口でもあります。茶道には、詩、書、文学、絵画、陶器その他の日本の豊かな遺産となっている手工芸品の分野が含まれます。

裏千家宗家である千玄室十五世の尽力により、茶道は、西欧の高等教育機関において学問分野として認識されるようになりました。私が勤務している大学では、学部と大学院レベルにおいて、2 学期（6 単位）の茶道の授業を実施しており、教材は裏千家からの直接の支援を受けています。

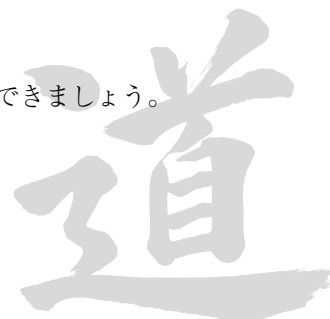
他方、武道は、学術的な背景が欠如していたり、主たる流派からの支援を受けていません。

もし武道を伝統的な方法で学ぼうと決意したなら、幾年かにわたり弟子入りをしなくてはなりません。このような方法には長い年月を要し、また最終的に西欧においては学術的な認証は得られません。私は、このような経験をした例の一人です。しかしながら、茶道を学んだおかげで、フロリダ国際大学（F I U）においてフルタイムの勤務が可能となったのです。

よって、武道は、学術的なプロフィールを築きあげることができる他の分野、例えば歴史、武器、戦略、哲学その他の関連科目と連携していく必要があると思います。

日本の修養的文化（武道・茶道）に対する米国の学生の理解と反応

私の学生がどの程度「行」の重要性を理解しているのかについては、次のように言うことができます。





アメリカの学生には、ほとんどの場合、彼らの学習過程において、さらに高い気づきのレベルへ達せしめる精神性（スピリチュアリティ）が欠如していると認識しています。この状況は、アメリカの短い歴史と全体的な文化の奥行きが無さから理解することができます。

日本は、武道と茶道の有する豊かな歴史に恩恵を受けています。その起源から 800 年以上も経っていますが、アメリカ人の学生が、あたかも日本文化の下で育てられて日本からやって来た人のように武道や茶道にたずさわっていることなど、誰が想像できたでしょうか。

しかしながら、実際に起こっていることなのです。人類の利益となるため、目標を達することができる強い精神と身体を持った完全な個へと導くであろう、終わりのなき学びを追及すべきであると、悟っているのです。

自ら日本で約 10 年間学んだ形態とできるだけ近い形で、武道（特に少林寺拳法）と茶道を促進しようと私を鼓舞しているのは、幾人かの個人にみられる気づきへの、こうしたひらめきなのです。

これは私の（ヨーロッパ人ではなく、アメリカ人としての）見解です。「修行」の経験がある生徒は殆どいませんし、武道や茶道を研究する上で必要な克己心や精神性が欠如しています。人間は、身体と精神の発展を達成するために、人間社会に有益な終わりのなき学びが必要なのです。

鹿屋体育大学の武道教育に対する助言

1. N I F S のカリキュラムを、英語で書かれた様々な学術出版物に掲載して、公表するためのより一層の努力が必要であると信ずる。
2. N I F S の教員として、国際的な学者を招聘する。
3. 教員や学生間の交流プログラム（提携）を西洋の諸機関と設立する。

例えば、アジア研究の学位を有する諸大学へ、女子剣道部員のグループを派遣して演武を行う。

より一般的に申し述べるならば、N I F S は、武道に関する研究を西洋と同様に、よりアカデミックなレベルなものに引き上げるべきです。人類の利益として、これらは哲学的（精神的）、健康的利益、政治戦略を含むべきで、日本の進歩した技術研究を基礎にしたスポーツ医学とより連携すべきです。

さらに付け加えると、N I F S はよりグローバルなキャンパスの環境づくりに尽力すべきです。将来的に、他の地域に、サテライトキャンパスを設置することを考慮すべきでしょう。これは、オンラインでのコース（学科）を提供し、N I F S にて補完研究（実技）を行うということも考えられます。

これらの試みは、日本や中国の主要な武道団体、例えば多度津の少林寺拳法や湖南の少林 Shaolin と連携して行われるべきでしょう。そして、N I F S の学位がこれらのプログラムに参加した学生に与えられるべきです（もし既存の N I F S を管理する法と不整合があるのなら、まずは認証プログラムを出発点として学位へと移行すればよいでしょう）。

最後に、大学生たちは、いかに卒業に際して自分の研究分野が就職に有益になるかを深く考えています。N I F S はこの観点により、学位を魅力あるものにすべきと考えます。

